

記念号の刊行にあたって

小田 宏信

藤垣芳文先生と宮脇俊文先生は2019年3月に退職を迎えられた後、成蹊大学特別任用教授として引き続き本学の教育・研究活動にご尽力されましたが、特別任用教授としての任期は2022年末をもって満了となり、これをもって経済学部専任教員の職を離れられることとなりました。両先生とも30年以上の長きにわたって、経済学部及び成蹊大学の発展・充実のため、さまざまな形で多大な貢献をされました。本号を退職記念号とすることで、両先生への感謝のしるしといたしたいと思います。

藤垣芳文先生は、一橋大学経済学部および一橋大学大学院経済学研究科で経済学を専攻された後、1981年4月に成蹊大学経済学部に専任講師としてご着任になりました。以来、40年間を成蹊大学にてお過ごしになられました。ご在職中、1986年度後期から88年度の前期にかけてはケンブリッジ大学およびロンドンスクールオブエコノミクスにて客員研究員として研鑽をつまれ、92年にはロナルド・コースの『企業・市場・法』の翻訳本を出版されています。その後も環境政策・経済政策や動学モデルに関わる研究成果を次々と公表になられました。経済学部内においては、経済学科主任・経済学研究科主任（1996～97年度）、大学評議員（2000～2003年度、2008年度）などを歴任後、2009年度から2012年度にかけて学部長・研究科長をおつとめになられました。私は、藤垣先生の学部長時、一部期間を第三学科主任として学部執行部にてご一緒させていただきました。いま思えば、2011年の震災対応など、非常に大変な時に学部長をお務めになられたのだと思います。極めて平穏な昨今となつては想像し難いのですが、不幸にもなぜかその頃、学生のトラブルが頻発しました。その度ごとに、学部長室にて対応が協議され、当該学生からの聴取も続きました。なかには学内だけで済ませられない案件もありました。私自身がもし同じ立場に置かれれば狼狽してまともな対応などできないことが容易に想像ができるのですが、藤垣先生はたえず冷静に的確なご判断をされておられました。対象学生を烈火のごとく叱責された時こそ、普段とは違ったお姿でしたが、それは慈愛に満ちた御指導のように私には感じられました。そして、その後も、藤垣先生にご相談や照会をさせていただく度、いつも、とてもお優しくかつ丁寧な適切なお助言を、何か心地の良い余韻が残るようなお言葉でいただきました。

宮脇俊文先生は、上智大学文学部及び同大学院文学研究科修士課程を修了後、関西外国語短大、神戸山手女子短期大学、淑徳短期大学を経て、1989年4月に成蹊大学にご着任になられ、英語・文学・アメリカ文化論に関わる科目を担当されました。この間、米国ブラウン大学（1994～95年度）、ミネソタ大学（2007年度後期～2008年度前期）にて在外研究を行っておられます。本学においては、1993年度の国際交流センター（国際教育センターの前身）発足時に国際交流委員会委員、2004年度の国際教育センター発足時に国際教育センター所員を担当されるなど、本学の教育の国際化のための体制がために大きく貢献されました。学部内においても、2008-09年度には第2学科主任として経済学部国際社会プログラムの運営等に尽力されました。ご専門は、F・スコット・フィッツジェラルド及びゼルダ・セイヤー・フィッツジェラルドら、ジャズ・エイジと言われた1920年代のアメリカ文学を中心に研究を蓄積されたほか、村上春樹研究者、ジャズ研究者としても知られています。2009年から2013年にかけては日本スコット・フィッツジェラルド協会の会長もお務めになりました。2019年3月に催された最終講義の演題が「周辺の文学者」とありましたように、宮脇先生は周辺の・周縁的であることの価値・意義を強く意識されていたようです。私も幾度となく励ましのお言葉を頂戴したことがあります。私をもまた良くも悪くもマージナルな人間とみなして下さったからなのかも知れません。

経済学の核心部を追求し続けた藤垣先生と、社会文化論的な観点から学部教育のフロンティアを切り拓いた宮脇先生とではお立場は対照的ですが、両先生とも成蹊大学経済学部の歴史に鮮明なる航跡を残されました。長年、お世話になった両先生に心から感謝申し上げますとともに、ますますのご健勝と一層のご活躍を心よりお祈り申し上げる次第です。

なお、両先生には、4月1日付けで成蹊大学名誉教授の称号が贈られました。

（成蹊大学経済学部長）